

乳児教育と乳児のコンピテンス

金子 保

(淑徳大学)

1 緒 言

ルソーは『エミール』のなかで、「人間の教育は誕生とともに始まる。話をする前に、人の言うことを聞きわけ⁽¹⁾る前に、人間はすでに学びはじめる」と述べている。ここに生涯教育の始点が求められる。教育とは、養育するにとどまらず、教授することが欠かせないからである。そうであれば、われわれの教授活動に応えうる乳児の学習能力⁽²⁾について、これが想定できるか否かが乳児教育の成立を論考するときの分岐点となる。

他方、わが国ではこれまで、乳児を対象とした教育について、十分に語られてきたとは思えない。しかし、乳児を対象とした保育に関する議論は多いようである。しかも、乳児研究は心理学の分野で近年隆盛の一途を辿っている。後述の通り新生児ですでに諸種の能力が備わっているという報告も認められる。それにもかかわらず、「乳児教育」についての議論は乏しい。教育心理学会においてすら、「乳児保育」を研究題目⁽³⁾とすることはあっても乳児教育についてのそれは見当らない。奇妙な事実としないわけにはいかない。

これには、わが国の社会経済的事情が関与している。国が保育養成機関の教科目として「乳児保育」を必修としたのは、1970年（昭和45年）のことで

4 I 生涯教育的学校論

ある。それに先立つ1960年代は、わが国経済の高度成長期に相当し、婦人就業率の増加はめざましく、核家族化も都市農山漁村を問わず進行していた。このため、乳児保育施設の増設が要請される事態が生じ、そのための保母養成が急がれることとなった。上記の乳児保育教科の必修は、こうした事態を反映するものと推察される。

このことは、わが国では乳児を保育するという事実が先行して、未だに乳児に関する教育問題が自覚的に捕えられていない事情を示すものと考えられる。ここに、乳児教育の成立を許さない所由が求められる。しかし、乳児の能力が教授に應えうるものであるとするなら、乳児教育は成立するはずである。おそらく近い将来、乳児保育から乳児教育への転換点⁽⁴⁾が来るに違いない。すでに、乳児教育用教材の開発は始まり、一部市販されている。障害児を対象とした治療教育の分野では、乳児研究の成果を基礎に据えた教育プログラムが実施されている⁽⁵⁾。また、乳児保育施設の保育者の姿勢も単なる保護養育（保育）の段階を越えて教授養育（教育）へと向かっているかに見える⁽⁶⁾。

以上のような状況のなかで、本稿は乳児教育の対象となる乳児の能力（competence）について吟味し、さらに乳児にとって親であり教育者であるわれわれの乳児教育に対する教授活動を主として動機的側面を中心に論考するとともに、乳児教育の成立を模索するものである。

2 乳児のコンピテンス

（一）J. Piaget の感覚運動的知能

われわれの教育動機は、子どもたちが心身ともに健康に成長発達することを願うところにある。そうした願いを実現しようと意欲して子どもたちに働きかける活動が教育活動であろう⁽⁷⁾。そのような願いや意欲は子どもの年齢によって変わるものとは思えない。生まれて間もない新生児であっても、そうした願いを持ち、意欲するわれわれの構えを否定することができない。健康

そんな乳児に接して、われわれは思わず微笑する。泣き声をあげる乳児が意識されるなら、心配の念に駆られて、こまごまと言葉をかけ、抱き上げ、授乳したり、おむつを交換する。われわれの、このような働きかけは、これまで教育的な視点から考察されることは少なかったのではないか。

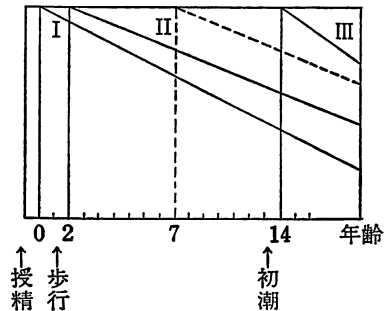
その事情は、従来よりわれわれが考えてきた教授内容では乳児の能力が応じられないとする思い込みによる。確かに、形式論理的な教授内容は乳児の能力を遙かに凌駕している。しかし、こうした認識能力であっても、これを獲得する道程と考えたとき、乳児がこの世界を知るプロセスがその第1歩をしるすものであろう。そのような乳児の能力に関する考え方を理論化した功績は、J. Piaget に帰せられる。Piaget は、「論理と科学を構成する諸原理が言語のはじまる以前からすでに発達をはじめているのだ」と主張している⁽⁸⁾。それは、乳児の感覚運動的諸活動に示されているという。乳児には、能動的な感覚運動的体制が備わり、これが

調節同化均衡化の反復によって発達変化をとげていくというのである。

その発達段階を、思いきって図式化してみると図1の通りである。図でⅠは、乳児期の感覚運動的知能の時期である。これはさらに次の6段階からなる。

- 1 出生より1か月頃まで、反射的運動段階
- 2 1～4か月、第1次循環反応の段階
- 3 4～10か月、第2次循環反応の段階
- 4 10～12か月、目的と手段の協応段階
- 5 12～18か月、第3次循環反応の段階
- 6 18～24か月、表象的思考の開始段階

図1 知能の発達段階



- Ⅰ. 乳児期 感覚運動的知能
- Ⅱ. 子ども期 操作的知能
- Ⅲ. 成人期 形式論理的知能

6 I 生涯教育の学校論

Piaget は、これらの段階が次の段階の準備期として作用し、「各段階は、その1つまえの段階から発展してくるもので、前の段階に単に付加されるのではない」と考えた⁹⁰とされる。このような段階相互間の関連性はⅠと次のⅡの間にも成り立つ。もちろん、ⅡとⅢの間にもそうした関連が認められるはずである。したがって、成人期の知能は表面にあらわれている部分のみを見るならば、形式操作的知能にはかならない。しかし、その深層には子ども期の操作的知能Ⅱの厚い層があって、さらにその下には乳児期の感覚運動的知能の層があるというように、三層構造となっていると考えられよう。

知能を、このような重層構造としてみるならば、乳児期の感覚運動的知能は成人期になっても最下層にあって形式論理的知能を補い論理以前の日常生活に対応していることとなる。実際、われわれ成人の日常生活を反省したとき、感覚運動的知能の支配する領域の広さは驚くほどである。生活習慣は、ほぼこれによっているといってもよい。

このような感覚運動的知能は、われわれが教えることなしに発達するかにみえる。それは感覚運動的知能体制が能動性を本質とするからと考えられる。これまで乳児は能動的とは考えられなかった。あたかも白紙のごとき存在であり、だからこそ乳児は無限の可能性を持つと信じられてきた。しかし、それは裏を返せば、受動的で無能力であり、だからこそ保護が必要であって、養育すれば足りる存在であると考えられてきたのではないのか。Piaget の “The origin of intelligence in children” は、こうした *tabula rasa* と⁹¹しての乳児観に痛烈な影響を及ぼしている。

(二) R. W. White のコンピテンス概念

前節で、Piaget の知能発達の段階を図示して、成人期が乳児期と切り離し論じられないことを示唆した。それとともに、乳児の能力の能動性について指摘した。実際、乳児は受動的で、無能力な存在とされがちである。skill, ability, capacity といった概念からすれば、乳児はとても有能とは思えない。確かに、筋力は微弱である。手先の巧緻性も貧しい。発声は単調で、か弱い。

泣き声ですらわれわれ成人に比べれば弱いであろう。発語ともなれば、有意味語は乏しく、言語によって意思の疎通を図ることはできない。栄養や排泄の行動にしても無能力で自立にほど遠い。こうした乳児の能力を生物学的に論考して、その有能性を指摘したのは C. Darwin (1877) であるとされる。⁰³

出生直後の新生児ですでに自身の体重を支えるほどの把握力を持っているというのである。これは進化論の立場からすれば、予想される能力であろう。

ところで、ここでこのような新生児の能力を驚異とするか否かは、その人の乳児観を反映する。近年の乳児心理学の成果によれば、これは驚異としないわけである。こうした乳児研究の系譜を辿ると行きつく研究者として R. W. White (1959) をあげることができる。White のコンピテンス概念によれば、筋力をはじめとする諸能力の微弱な乳児であっても、効力(effectance)からすれば有能であるということになる。⁰³ 乳児の微弱ではあっても自発的で能動的な行動が先行条件となつて、当の行動に対応した特定の効果が後続して生起する。つまり、このときのフィードバックは任意ではない。そのようなフィードバックの経験それ自体が報酬となるわけである。乳児の活動性がフィードバックされて、特定の効力を生む。その効果が伴起する。これをコンティジェンシー (contingency) という。J. S. Watson (1967) の伴起性走査仮説 (contingency-seeking hypothesis) は、そうした考え方のうちのひとつである。⁰⁴ Watson は、母親の乳児に対する反応性が伴起性走査の特性をよく示しているとしている。この仮説によれば、乳児は報酬となる刺激の先行反応に対して、これを走査 (seeking) する傾向をもって生まれてくるとされる。

すなわち、我々にとって驚異なのは、たとえ微弱な微笑や泣き声であっても、確実に母親を呼び寄せ、立ち去らぬような効果をもつところにある。うっとうしげな fuss crying は、おむつ交換を生起させるかも知れない。空腹によるリズムカルな泣き声は哺乳状況を構成する。微弱な吸吮力であっても、確実に栄養を摂取する。こうした母親の母性的行動を促すサインとしての泣き声や微笑を発することのできる能力を驚異とするのである。あるいは、乳首をしっかりと口にくわえて哺乳できることの方がわれわれにとって

8 I 生涯教育の学校論

驚異なのである。⁰⁹White は、こうした能力を competence とよび、それまでの能力概念と区別しているわけである。それは丁度、オーディオ機器のように、ダイヤルつまみを操作する能力は微弱であっても、これを適確に操作することによりFM放送が受信されるのに似ている。よりよく育てたいという意欲を自覚する母親が乳児の脇にいて初めて、その能力を効果的に発揮できるが、そうした能力がコンピテンスといわれるわけである。

(三) R. A. Butler の学習実験

R. W. White のコンピテンス概念に影響を与えたのは、動物心理学の業績であるという。R. A. Butler (1953) は、サル⁰⁹の学習実験の際に、窓が開いて仲間のサルや模型の汽車などが見えるだけの報酬で学習が成立することを確かめたのである。⁰⁹動機的側面からすれば、飢餓、性、攻撃や恐怖の他に、当時としてはニュールックの探索行動 (exploratory behavior) の動機が指摘されたわけである。同じような学習実験はネズミでも実施され、新奇な環境刺激が報酬とな⁰⁹って学習が成立することが実証された。このような学習行動は人間では乳児期初期に認められる。Piaget の感覚運動的知能の発達段階では、二次的循環反応の段階に相当すると考えられる。hand regard, prehension, visual attention にしても、4か月前後には新奇な刺激が報酬となって各々の行動が生起し、これが繰り返される。たとえば、図2は hand regard の発達経過を示したものである。ここで、持続的⁰⁹ hand regard は、一次的循環反応が均衡に達した出来事と解釈することができる。次に、指を動かしたり、手首をまわしたり、あるいは注視する手を遠ざけたり裏返して手背を見つめたりする。もう一方の手が視野内に登場して見比べることもある。これらはいずれも、そのようにして変化する図柄が報酬となって成立する行動である。こうして、およそ4～5か月で乳児は巧緻な手の機能を獲得するのである。

図3は prehension の発達経過である。⁰⁹ここでは swiping (対象物を手でたたきつけるような行動) から始まり、確実に手をのばして対象物をつかむこととなる。図で、ピアジェタイプリーチ (Piaget type reach) とは、Piaget が

記述したリーチングであって、B. L. White (1970) により銘名されたものである。^(a)これは二次的循環反応と考えられる。対象物を意識的に把握する行動の origin と考えられるからである。興味深いことに、prehension には捕捉とか把握の意味の他に理解、会得の意味が知られている。乳児にとって unfamiliar な対象物に手をのばして、これを捕捉する行動は、理解や会得のプリミティブな出来事とされるわけであろう。なじみのない対象物になじむプ

ロセスを学習と考えるわけである。それは食物が、口の中に取り込まれ、そしゃくを受けて自分の身体になじむように、繰り返し特定の対象世界に手が差しのべられて prehension は成立することになる。感覚運動能力は、これを行行使することによって発達するわけである。

図 4 は、R. L. Fantz(1963)の研究成績の一部である。^(a)Fantz は生後5日以内と、2～6か月の乳児を対象にして、ひとの顔、標的模様 (bull's eye)、新聞の断片、及び白黄赤の計6種の視覚刺激を用いて、各々の刺激図版に対する注視時間を測定した。その結果、ひとの顔を注視した乳児が生後5日以内の新生児でも最も多く、2～6か月児では、この傾向はさらに著しかったのである。そればかりか C. C. Goren (1975) は、生後10分以内の新生児ですら、よく整ったひとの顔の図柄を最もよく注視し追視したと報告している。^(a)実際、乳児は2か月を過ぎると我々と視線を合わせ凝視することが知られている。もっとも、この時期は、視覚探索活動が活発化する時期であり (B. L. White, 1971),^(a)一次的循環反応の段階に相当する。実は、それに先立つ反射的段階ですでに我々の顔を見つめている。P. Salapatek (1975) は、この段階

図2 hand regard の発達(著者ら, 1973)

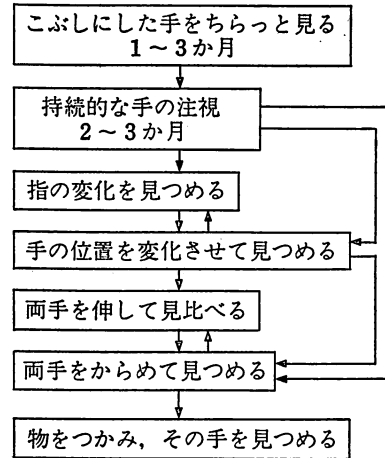
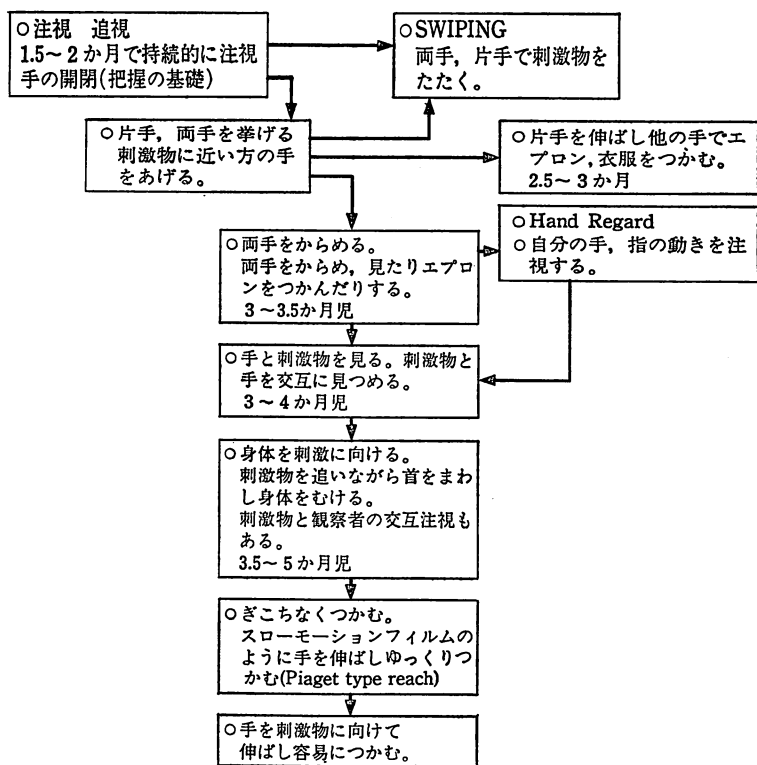
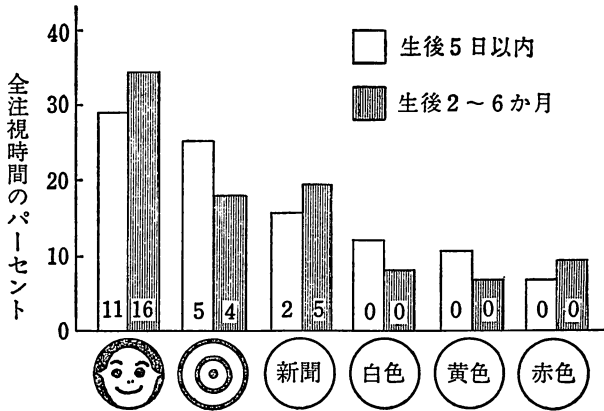


図3 prehension の発達 (著者ら, 1973)



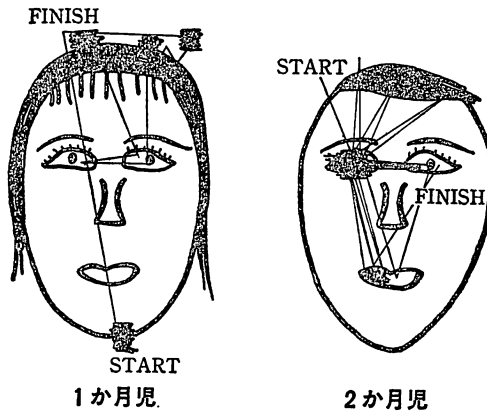
で我々の目や口もとを凝視し始める事実を eye camera の手法を使って明らかにしている²⁴。これによれば、新生児期は我々の顔の周辺部を視覚的に走査するわけである(図5)。したがって、我々が視線を合わせようとしても、新生児はこれを避けていくことになる。これをもって、新生児期を過ぎる頃より視力が生ずると解釈されてきたものと考えられる。成程、新生児と face to face の関係をとることは容易である。とくに state level が quiet awake²⁴ のときには、こうした関係を形成しやすい。しかし、視線は合わせにくい、無理に合わせようとするれば、目そらしする。さらに深追いすれば不快な表情から

図4 視覚選好 (R. L. Fantz, 1963)



泣き始めることになる。慎む必要があろう。二次的循環反応の段階に至り、乳児はひとの顔を選好する傾向は顕著化して、特定の成人(母親)を他と識別するようになる。

図5 視線の動き (P. Salapatek, 1975)



(四) S. Freud の自我理論

R. W. White のコンピテンス概念に影響を与えたのは、動物心理学だけで

はない。White によれば、精神分析学の自我理論は研究領域の違いにもかかわらず、動物心理学とよく似ていることを指摘している。とくに、子どもにとって重圧となる外界に対して、これをマスターする自我本能(ego instincts)の傾向を検討して、探索行動の動機との類似を明らかにしている。周知の通り S. Freud によれば、自我は性的本能(sexual instincts)を起源とする。これを id ないし es とよび、快感原則に支配されているとする。ところが、快感原則だけでは外界の重圧から自己を保存するに際して、「はなはだ危険」である。そこで自我の「現実原則が、それに交代する。現実原則は、最後には快感を獲得する意図を放棄することはないけれども、満足を延期し、満足のさまざまな可能性を断念し、長い迂路を経て快感に達する途中の不快を一時甘受することをうながし、強いる」のである。自我の現実原則が、es の快感原則に取って代わることにより現実世界の重圧を避けるわけである。このとき自我は、現実世界の新奇で、なじみのない刺激の取り込み(introjection)によって、その内容を拡充することとなる。他方、unfamiliar な刺激事態は、ときには自我の重圧となる。これが es にとって快感原則実現の妨げとなるなら、自我にとって二重に重圧となるわけである。たとえば、Freud は『快感原則の彼岸』の中で、1歳半の男児の「何でも手に入るこまごましたものを、部屋のすみや寝台の下などに、遠くほうり投げる」という困った癖を長期にわたり観察して、これが母親の不在という子どもにとって苦痛な出来事に由来していると解釈している。「母親がじぶんの乳で育てた上に、ひとの手をいっさい借りずに世話してきたので、心からなついていた」ので、子どもにとって母親の不在は苦痛以上のものであったと思われる。このような外的重圧を避けるためには、自我構造を、それを苦痛としないものとする以外に道はない。「困った癖」は、こうして出現したと解釈される。「子どもは、自分の手のとどくもので、おなじ別れと再会を演出してみて、それであれば衝動放棄をつぐなうのである」と Freud は述べている。ここで衝動とは es のそれであろう。こうして子どもは、es と外界との重圧をマスターすることとなる。

このような Freud の解釈には貴重なアンティテーゼがふくまれている。それは、新奇な環境的重圧によって起こる子どもの不安や恐れを、子どもはどのようにして制止するのかという課題である。この課題は、自我構造の発達と、対象関係 (object relationships) の意義を問うこととなる。

(五) J. Bowlby のアタッチメント理論

後者の対象関係の意義は J. Bowlby のアタッチメント理論 (attachment theory) に受け継がれている。Bowlby は、精神分析学の対象関係論の問題意識を K. Lorenz から始まる動物行動学 (ethology) の成果を基盤にして展開している。ところで、アタッチメントとは、元来「想いをよせる気持や、なにものかにひきよせられる感じ」を意味し、愛情 (love) の系譜に属する概念である。しかし、love ではなく attachment としたのは、それが単に思い合うとか、かわいがるとかいった関係ではなく、問題はどのようなプロセスとメカニズムがあって、そのような関係が成立するのかという点に求められる。M. D. S. Ainsworth によれば、それは特定の人物が他の特定の人物に対して築き上げる愛情による結びつきであるとされる。Bowlby はこのようなアタッチメントの起源は、乳児の生得的行動型である sucking, clinging, following, crying, smiling の5種の反応にあるという。これらの反応は新生児期から観察され、いずれも特定の人物である母親が focus となった学習を通じて母親に対するアタッチメントが形成される。すなわち、乳児は、crying, vocalization, smiling, attention によって母親を呼び寄せることができる。乳児は、新生児期から十分にコンピテントなわけである。さらに、sucking, clinging, following により、乳児は母親につき従っていることができる。母親のアタッチメント行動は、このような乳児の能動的行動によって触発される。これに対し、乳児の行動は母親が抱き上げたり、声をかけることによって終息する。Bowlby は、乳児と母親の関係を、このような触発条件と終息条件の複雑なメカニズムによって管理されたシステムと考えたわけである。

ところで、アタッチメントのシステムは乳児のコンピテンスの発達により

14 I 生涯教育的学校論

高度化する。^(a) Bowlby は4段階に分けて記述している。

第Ⅰ段階（0～3か月）は特定のおとなを識別することはないが、前述の生得的反応として、ひとを志向する。

第Ⅱ段階（4～6か月）では、1人ないしそれ以上の特定の人物が他の人物から識別されるようになる。

第Ⅲ段階（7～24か月）では、単に母親のアタッチメント行動を触発するシグナル行動を活用して母親を呼び寄せるだけでなく、移動能力を活用して母親につき従うことができる。とくに、この段階の初期では母親に対して選択的な反応型が認められるようになり、見知らない人物（strangers）には警戒行動を示し、不安や恐れを抱く。いわゆる“ひとみしり”である。このとき、すでに形成されたアタッチメント関係を利用して、ストレンジネス（strangeness）な事態の取り込みが行われる。乳児にとって新奇な重圧事態は、母親を安全基地とすることによりマスターされるわけである。

第Ⅳ段階（24か月以上）になると、母親を goal した行動システムに修正を加えることが可能となる。母親の行動計画を洞察して、それまでの goal を修正して安全基地を確保するのである。こうして探索行動はますます活発となる。換言すれば、新奇な環境事態のマスターのために、アタッチメントが役立つわけである。母親にしても、子どもの行動計画の読み取りの努力は欠かせないわけであり、こうして両者のパートナーシップの基礎が形成されるのである。

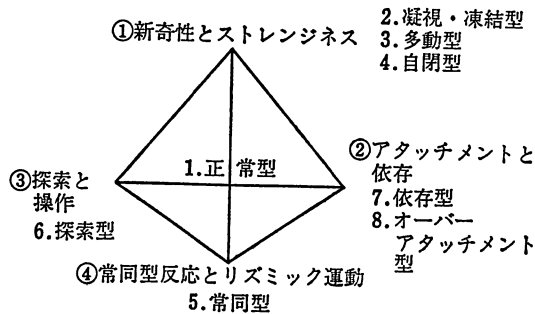
このようなアタッチメントの形成は、母親だけでなく、父親との間にも形成される。きょうだいとの間にも、それ以外の人々との間にも形成される。その基盤は、母親ないしそれに代わる者との間のそれであるのは言うまでもない。

（六）小嶋四因子仮説

子どもにとって新奇な重圧事態は、子どもに不安や恐れを生じさせる。これを子どもはどのようにマスターするかという課題を解くのに都合のよい仮

説は、小嶋四因子仮説⁶⁾ (1972)である。これは、乳幼児の発達臨床の立場から、プレイルームにおける子どもの行動型を解釈する仮説として提起されたものである。それは、図6に示す通りであって、

図6 小嶋四因子仮説 (1972)



①ストレンジネスと新奇性、②アタッチメント、③探索操作、及び④常同型反応とリズム運動の4因子から成る。ここで常同型反応とは、finger-sucking, bodyrocking, head banging等を指す。これらの因子は、いずれも起源を異にするとはいえ、相互にダイナミックな関係があるという。図で、探索操作とアタッチメントにはバランスの関係がある。アタッチメント関係を安全基地として乳幼児の探索操作活動が展開し、探索の途上で不安や恐れが意識されれば、アタッチメントを活用して、これを制止することができるという意味である。また、常同型反応とアタッチメントとは負の相関、つまり常同型反応がアタッチメントの代理機能を果たす関係にある。アタッチメントの対象が失われたとき、あるいは対象関係が未熟なときといえども、子どもに不安や恐れは免れ難い。このようなとき、常同型反応はアタッチメントの代理機能を果たすわけである。こうして子どもは、新奇で unfamiliar な外界の探索操作を繰り返して自我内容が拡充され、コンピテンスの発達が図られることとなる。

このようにして、乳児のコンピテンス等の発達には、アタッチメントが欠かせないわけである。Bowlbyの言回しに倣うならば、体の成長や健康にとってビタミンや蛋白質が不可欠であるように、コンピテンスの発達にとってアタッチメントは欠かせない役割を果たしているわけである。

3 乳児教育の成立

(一) 乳児保育との関係

乳児保育は家庭保育に対する概念であるとされる。⁶³ 乳児を児童福祉施設である乳児院や保育所において集団的に保育することを指すわけである。これは、乳児の保育が社会的に要請される前述の事情を反映して、昭和45年に保母養成教科目として必修とされることにより改めて定義づけられるようになったものである。では、それまではどのように扱われてきたのであろうか。吉岡毅らによれば、それまでの保育は幼児が中心といつてよく、「乳児保育はその一部に特殊なものとして位置づけられていた」⁶³のである。それという⁶⁴のも、保育とは、「保護教育あるいは保護養育から由来している」からであらう。乳児が教育の対象となり難いにしても、保護と養育の対象にはなる。保育の育が教育を意味するとしても、保護が欠かせないとすれば、乳児は保育の特殊なものとして位置づけられるというわけであらう。

これに対して、教育は教授と養育を基礎に発生しているとされる。前述の論法からすれば、乳児は教授の対象となり難くとも、養育の対象とはなりうるから、乳児教育は教育の特殊なものとして位置づけられるとしても差支えないこととなる。しかし、そうであれば教育と名づける必要性は失われる。単に乳児養育で間に合う。同様に、乳児保育ではなくとも、乳児保護で間に合う。単に養育ないし保護であっては差支える事情があるからこそ保育であり教育であるわけと考えられる。

それでは再び、保育とは何であり、教育とは何であらうか。これについて論考するとき注目されるのは、家庭児の場合には乳児保育の使用が避けられるが、他方家庭教育はしばしば使われている。家庭保育はなじまず、乳児の場合には育児とか子育てと呼ぶのである。これは、乳児教育が家庭での育児と乳児保育の一部をふくむと見做せることを示唆している。すなわち、乳児

保育の保育は「保護養育あるいは保護教育」なのではなく、「保護養育と保護教育」の二義あるとし、後者を乳児教育の一部とするのである。こうして現行の乳児保育の教育的内容は乳児教育の一部と重なるわけである。

(二) 乳児教育の動機

教育は養育だけでなく、同時に教授の必要性が自覚されたときに成立するとすれば、その対象が乳児の場合、単に養育するだけで十分と考えられがちであるが、それでは乳児教育は成立しないこととなる。しかし、乳児のコンピテンスからは、乳児といえども我々の教授の自覚の欠かせないことが推測される。問題は、では何を教授できるのかというようにして乳児教育のカリキュラムにまで一足飛びに考えてしまうところにある。そうではなくて、教授とは元来どのような活動なのかを問うことから始めなくてはならない。

村井実(1963)は、ソクラテスをすぐれた教師として教育の視座から描いている⁶³。ソクラテスの教育方法はプラトンの対話篇から明らかな通り主として対話によったとされている。その動機は、生産愛(エロス)にある。善や美をアテナイの若者の中に見出し、対話によりその若者の上に生産をもたらし活動が教育なのである。したがって、エロスの名に値する活動、「それは肉体の上でも心霊の上でも美しいものの中に生産することです⁶⁴」ということになる。善や美の内的所有、すなわち自己実現的所有を教育の動機として認めることができる。こうして、「彼は既に久しく身に宿していたものを生産し創造する。側にいても離れていても、彼はその人のことを思い、また出生した者をその人と共に育て上げる⁶⁵」こととなる。こうして、ソクラテスの教育は、共同の生産に対する愛から始まるとされるわけである。そうであれば、それは「けっして豊かな者から貧しい者へ、先立つ者から遅れた者へ、熟した者から未熟な者へ、というような意味での救済や指導や教授活動への愛ではありえない⁶⁶」こととなる。

このようなソクラテスの教育愛から始まる教授活動であれば、対象が乳児であっても実現しうる。実際、精神発達が乳児と同一水準にあると推測され

る重度障害児（者）の場合にはすでに教授の努力が払われている。⁽⁶⁹⁾ それというのも、ソクラテスの教育では、対象児（者）の能力が教育成立の必要条件とは考えられていないからである。むしろ、「遅れた者にも、未熟な者にも、なおかつ美しいもの善いものへの根源的衝動力を見いだし、その衝動力において人間を愛するというすぐれて人間中心主義的な契機を含むものである。」⁽⁶⁹⁾ 従って、乳児の smiling や sucking, hand regard や prehension にしても、その“根源的衝動力”に気づき、思わず惚れ込むところから乳児教育が始まるのである。新生児の諸種のシグナル行動ですら、適確に受信できる母親がいて乳児はすでにコンピテントであるが、それは若者を愛する教師が側にいて初めて有効な対話関係が成立するソクラテスの教育方法を想起させる。その結果、「かいう人々は、肉身の子供がある場合よりも遙かに親密な共同の念と遙かに鞏固な友情とによって互に結びつけられる」⁽⁶⁹⁾ のである。このように、ソクラテスの教育愛は、“共同の生産”にとって不可欠であるが、それは乳児のコンピテンスにとってアタッチメントが欠かせないとする乳児教育の事情と一致する。この点は、乳児教育でとくに強調されなければならない。

（三） 乳児教育の方法（1）

乳児教育が、われわれの乳児に対する惚れ込み（エロス）から始まるというソクラテスの教育動機について指摘したが、このときわれわれは期せずして乳児のわれわれに対するエロスを意識することになる。乳児のエロスの対象としてわれわれが選ばれることになるということである。Bowly のアタッチメントも、そのような概念として理解できる。それは一方的なものではなく、相互的な関係である。それは、依存や支配の関係ではない。対話的關係といったらよいと考えられる。一方的依存関係や支配関係では対話は成り立たない。対話的な相互関係は、乳児初期ですでに成立する。

例えば、T. B. Brazelton (1974) は、生後2週から20週の健康乳児を対象に母親との対面時における相互関係を行動分析している。⁽⁶⁹⁾ その結果乳児の母親

に対するattention には一定のサイクルが認められている。乳児が見つめ、次いで目をそらすサイクルは1分当たり4.4回平均で繰り返され、次第に両者の興奮が高まっていくというのである。このとき、目をそらした状態は、母親との関係を断ち切った関係ではなく、母親への attention をいつでも再開できる構えをもつ状態であるとする解釈は注目される。一方的語りかけやあやしかけの続く限り、乳児は母親への attention を示さず、目をそらしたままであっても、母親が語りかけやあやしかけを終えたとき、乳児は母親を再び見つめ発声するエピソードがそうした関係をよく示している。ここには、対話関係の原型をうかがうことができる。それは、乳児の意識とわれわれの意識との関係として捉えることができる。視線や発声、しぐさや言葉の交し合いの関係は、単なる行動の関係ではない。乳児心理学の研究者は、現在のところ行動分析を中心に研究を進めているが、それは意識の交し合いと考えることもできる。ここで、後者の視点は重要である。教育は意識に働きかけることを本質とするからである。乳児教育は、乳児の精神発達を目的の一部とする。このとき、精神は諸種の行動ではない。行動は行動であって、それ以上のものではない。これには異論が考えられる。中枢神経系の機能を精神とする考え方からは多分批判されるであろう。しかし、精神は物質ではなく、中枢神経系は物質である。物質と精神がどのような関係をもつのか、これを明らかにすることなく中枢神経系の機能の増進を乳児教育の方法とすることはできない。それは、治療の領域に入る。あるいは、それは単なる養育で済む。乳児保育で十分であるともいえる。乳児教育の目的を乳児の精神発達に置くならば、この議論を避けることができない。これについては、稿を改めたいと考えるが、見通しとしては、精神は物質ではなく意識によって形成されるという仮説は提示しておきたい。乳児の意識と我々の意識の対話的關係が、乳児教育の方法として検討される価値があるのではないかと考えられるからである。

(四) 乳児教育の方法 (2)

乳児教育の方法の基礎として、我々と乳児との対話的關係を取り上げた。これが、乳児の学習経験を構成することになる。精神発達を実現する機会といってもよい。それは単一の経験ではなく、繰り返される経験である。繰り返されて両者は次第に興奮することとなる。それは感動の経験に至る。それは、ときには歓喜であり、ときには悲哀である。愛であり憎しみである。そうした感動の経験は、我々の意識と乳児の意識との繰り返される交合の中に形成される。あるいは、乳児のひとつの意識が、別の意識の触発条件となって我々の思考にも似た意識活動が展開することもある。そうした乳児の経験は、我々のそれがそうであるように、ときには感動の経験へと導く。オルゴールメリーや自身の手を見つめる乳児の興奮も、こうした出来事と解釈される。そこに、遊具や玩具の乳児教育における意味を見いだすことができる。これを、教材とよぶとすれば、対話的關係は、そうした教材との間にも成立するかにみえる。しかし、それは一時的で終わる。遊具や玩具は乳児の意識内容を了解することがないからである。それでも、繰り返し展開することもある。その場合でも、一時的な場合にしても、乳児自身の意識活動の展開を意味するものである。そうした乳児の意識内容の了解があって 対話的關係はさらに持続することとなる。したがって、教材はわれわれが与えるにしろ乳児が選ぶにしろ、それを活用してわれわれと乳児との対話關係の発展を効果的に推進するとき、その価値を発揮すると考えられる。それとともに、われわれの了解力が乳児教育では不可欠であることとなる。乳児の意識内容をわれわれが了解できて、われわれとの関係の中で乳児は感動の経験を持つことができる。それがまた、われわれの感動でもある。乳児意識の了解の問題は、乳児教育にとって緊要であるといわねばならない。⁽⁴³⁾

4 結 語

本稿では乳児のコンピテンスと、乳児教育の成立をめぐる問題について論考してきた。最後に、得られた所見のうち主要な内容を要約すれば 次の通りである。

(1) 乳児は誕生とともに十分コンピテントである。(2) 乳児がコンピテントであるためには、乳児の行動の意味を理解するわれわれの存在が不可欠である。(3) われわれと乳児との間にはアタッチメント関係が成立する。(4) アタッチメントは、探索行動の活発化をもたらし、乳児に外界の取り込みの効果を生む。(5) 以上の経過を教育的視点から考察することができる。われわれと乳児は対話的關係を持ち、これにはわれわれが乳児意識を理解する必要がある。(6) 従来の乳児保育は、こうした教育的内容を含んでいる。

以上の通り要約してみたが、それぞれの問題について十分に論考しているとは思えない。論考から省かれた重要な問題もあるように思う。冒頭に掲げたルソーの引用文を励みに更に稿を深めたいと考える。生涯教育が、誕生とともに始まるとすれば、乳児教育は疎かにはできないからである。

〔注〕

- (1) ルソー（今野一雄訳）『エミール』（上）岩波文庫、昭和37年、p. 71
- (2) 教育の概念については、村井実『教育学入門』（上）講談社学術文庫、昭和51年、pp. 22～6による。
- (3) 日本教育心理学会第22回大会発表論文集（1980、東京大学）
- (4) 例えば、国分義行監修『1日10時間育児法』創造教育センター、藤永保他監修『ピピの幼児教室』（株）サンマーク、などがある。
- (5) V. M. Johnson & R. A. Werner, A step-by-step learning guide for retarded infants and children, Syracuse Univ. Press, 1975. ボイタ法、ボバース法も、このような試みに利用されている。
- (6) 二木武・川井尚編『乳児の行動発達と保育看護』川島書店、1980。本書は、保

22 I 生涯教育的学校論

育者の姿勢の同様の变化に対応して企画されたものである。

- (7) 村井実, 前掲書, p. 17
- (8) M. A. ボーデン (波多野完治訳) 『ピアジェ』岩波現代選書, 1980, p. 41
- (9) 以下の図式化は, 上山春平『深層文化論序説』講談社学術文庫, に示唆を受けている。
- (10) M. A. ボーデン, 前掲書, p. 44
- (11) J. ピアジェ (谷村覚・浜田寿美男訳) 『知能の誕生』ミネルヴァ書房, 昭和53年
- (12) N. L. Munn, The evolution and growth of human, behavior, Houghton, 1955.
- (13) R. W. White, Motivation reconsidered : The concept of competence, Psychological Review, 1959, 66, 297~333.
- (14) K. コナリー・J. ブルーナー編 (佐藤三郎訳編) 『コンピテンスの発達——知的能力の考察——』誠信書房, 1979, p. 276
- (15) 金子保, 哺乳機構の発達とサッキングの効果, 乳幼児栄養行動の実際 (改訂版) 総合医療教育研究会, 1982
- (16) R. A. Butler, Curiosity in monkeys, Scientific American, 1954.
- (17) A. K. Myers' & N. E. Miller, Failure to find a learned drive based on hunger : evidence for learning motivated by "exploration". J.comp. physiol. Psychology, 1954, 47, 428~436.
- (18) 金子保他『Hand Regard の発達について』安田生命社会事業団年報, Vol 8, 1972
- (19) 金子保他『Prehension の発達について』安田生命社会事業団年報, Vol 9, 1973
- (20) B. L. White, Human infants, Prentice Hall, 1971
- (21) R. L. Fantz, Pattern vision in newborn infants. Science, 1963, 140, 296~297.
- (22) C. C. Goren, M. Sarty, and P. Y. K. Wu, Visual following and pattern discrimination of face-like stimuli by newborn infants, Pediatrics, 56, 4, 1975, 544~548.
- (23) P. Salapatek, Pattern perception in early infancy. In L. B. Cohen & P. Salapatek (Eds.) Infant perception : From sensation to cognition, Vol 1. Academic Press, 1975.
- (24) 例えば, P. H. Wolff, The classification of states, Psychological Issues, 17,

- 5, 1966, 7~11. によれば, R. S. (regular sleep), I. S. (irregular sleep), P. S. (periodic sleep), D (drowsy), A. I. (alert inactivity), W. A. (waking activity), C (crying) の7水準に分類する。quiet awake は A. I. に相当する。
- (25) S. Freud (井村恒郎訳) 『自我論』日本教文社, 昭和45年, p. 7
- (26) 同上, p.13
- (27) 同上, p.14
- (28) J. Bowlby (黒田実郎他訳) 『母子関係の理論 I, II, III』岩崎学術出版社
- (29) M. D. S. Ainsworth et al, Patterns of attachment, Wiley, 1978.
- (30) 知能の発達とアタッチメントの関係については, 拙著『アタッチメントと保育看護』二木・川井編『乳児の行動発達と保育看護』川島書店, 1980, pp.112~6
- (31) 小嶋謙四郎『発達臨床心理学』朝倉書店, 昭和47年
- (32) 二木武・金子保・松島富之助『乳児保育』同文書院, 昭和51年, p. 2
- (33) 吉岡毅, 谷口喜久子『乳児保育』光生館, 1974, p. i
- (34) 同上, p. 2
- (35) 村井実『ソクラテス』牧書店, 昭和38年
- (36) プラトン (久保勉訳) 『饗宴』岩波文庫, 昭和27年, p.104
- (37) 同上, p.109
- (38) 村井実『ソクラテス』p.105
- (39) 糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス, 昭和43年
- (40) 村井実『ソクラテス』p.106
- (41) プラトン『饗宴』p.109
- (42) T. B. Brazelton, et al, The origin of reciprocity : the early mother-infant interaction, In M. Lewis & L. A. Rosenblum (Eds), The effect of the infant on its caregiver. Wiley, 1974.
- (43) 精神と物質との関係および経験, 意識, 了解等の概念については, 戸川行男著作集, 金子書房, を参照。